2009年(平成21年)11月27日(金)　東京新聞

放送&芸能

「もう一度見たい」かなう

日本で働く中国人男性と、中国に残った家族の十年間を追ったドキュメンタリー番組「泣きながら生きて」が、二十八日から二週間、東京・新宿の映画館「新宿バルト9」で上映される。三年前にフジテレビで放送され、感動を呼んだが、その後は再放送されていない。上映に向けて動いた大学生の思いとともに、多くの人が「もう一度見たい」と切望したこの番組を紹介しよう。

（宮崎美紀子）

劇場公開されるドキュメンタリー「泣きながら生きて」
©2006 フジテレビ／東方吉祥

フジ「泣きながら生きて」　映画館で再び

3年前放送 幻の ドキュメント

「泣きながら～」は二〇〇六年十一月三日、無名の市井の人を追ったドキュメンタリーとしては異例のゴールデンタイムで放送された。企画・プロデュースの張麗玲さん（CSの中国語チャンネル「大富」社長）、フジテレビの横山隆晴プロデューサーらが手掛けた一連の「中国ドキュメンタリー」（「小さな留学生」「若者たち」「私の太陽」「中国からの贈りもの」）の第五弾であり、最後の作品だった。

「物語」は一九九六年から始まる。主人公は丁尚彪さん。七年前に妻と娘を残して来日し、いくつもの仕事を掛け持ちして働きづめの日々を送っている。彼を支えるのは、一人娘に一流の教育を受けさせてやりたいという思い。そんな父に感謝と同時に複雑な思いを抱く娘。家を守る妻。丁さんの凄まじい意志の強さ、「生きること」の厳しさと素晴らしさ、家族の絆が多くの人の胸を打った。

大学四年生の中村俊喜さんも、その一人。昨年秋、就職活動の最中に番組と再び出合った。内定をもらえず働く意味がわからなくなっていた彼に、番組は前に進む力をくれた。「見てもらいたい人が僕の周りにたくさんいるし、僕が名前を知らない人にも見てもらいたい」。その思いに賛同する映画配給プロデューサー、配給会社の力を借り、単館ではあるが劇場公開が実現することになった。

今年二月、中村さんと会った横山プロデューサーは、こう振り返る。

「彼は『これを持って全国の公民館を回りたい』と言った。もう一度見たい、DVDが欲しいと言う人はいたが、彼は日本中の若い人に見せたいと、『他者への思い』で動いていた。周囲の学生たちもボランティアで頑張っていた。だから意気に感じた」

放送するめどもないまま撮り始めた「中国ドキュメンタリー」もまた、張さんの「他者への思い」から始まっていた。番組の原点を思えば、こういう形でもう一度世に出るのは自然な流れだったという。

一方、この三年間、再放送を望む声を直接聞き続けてきた張さんは「十年かけて作った番組でもあり、多くの人に見てもらえることは、制作者にとって、これ以上はない喜び。世の中、本当に不景気で厳しいけど、一人でも多くの人の勇気や力になれば幸せです」と話している。

テレビドキュメンタリーの劇場公開を実現させた中村俊喜さん＝東京都千代田区で

企画した中村俊喜さん「同じ思いの人に」

中村さんは慶応大学の四年生。来春から社会人になる。二十二歳の彼は、この作品をどう受け止めたのか。

「『こんなに採用されないなら、働く必要なんてない』とすら思っていたが、丁さんの方がもっと厳しい。それでも前を向いている頑張りに感動した」

実は、放送時も番組をテレビで見ていた中村さん。志望の大学に入れず鬱々としていた時で、不満ばかり言っている自分が恥ずかしくなった。この番組には「これまでやってきたこと、これからやろうとすることへの励ましがある」という。

自分が救われたように、同じ思いをしている人たちに見せたい。ごく一部の映画だけが大宣伝のもと大々的に上映されるが、自分が劇場で見たいのはこういう映画だ、という映画好きとしての思いもあった。試写会や上映会などの活動を通じて、今は「きっとメッセージは届く」と、作品の力を確信している。

「この作品のテーマは『働くこと』だと思ったが、それは僕の先入観。三十代の人なら子供との関係性を考えるかもしれないし、四十～五十代なら実家の親のことを思うかもしれない。作品を通じて、今の自分が抱えている問題と向き合い、何を思うか。そこから感動は生まれる気がするんです」。一年前の今、この状況を想像できなかったという。「他者への思い」は、もうすぐかなう。

DIORAMA 音楽館

ノリノリのロックシンガー

さが魅力ののぞみちゃんが、「ロック!?」とちょっと意外に思う人もいるのでは？　ドラマやCMに引っ張りだこ、大人気の子役・大橋のぞみちゃんをイメージキャラクターに起用したカルビー「ポテトチップス」のCM第二弾がスタートしました。

新CM「ポテトチップスコンソメパンチ」では、のぞみちゃんがコンソメパンチBANDを率いて、ロックに挑戦しています。「♪元気がない子にコンソメパーンチ！」と、商品名、商品特長（パンチが効いた飽きないおいしさ）をストレートに伝える歌詞とノリのよさがポイント。

ほのぼのとしたかわいらしさの中に、ロックのライブ映像を見てもらい、ノリや雰囲気をつかんでもらったそうです。

まさに、彼女にとってはロック初体験！　撮影に当たっては、スタッフ全員がライブ会場の観客となり、ステージを盛り上げました。初めは緊張していたのぞみちゃんも、最後はこぶしを突き上げ、ジャンプしながら歌い上げ、ノリノリのロックシンガーになりきっていました。

さすが名子役ののぞみちゃん。果たして次はどんな役に挑戦してくれるのか、楽しみなところです。

（涼）

ノリノリで「コンソメパーンチ！」と歌う大橋のぞみ

カルビー「ポテトチップス」
大橋のぞみのコンソメパンチBAND

言いたい放談

ポスト クドカン？

稲増　龍夫

脚本家でドラマを見るという流れは、一九七〇年代の山田太一、倉本聰、向田邦子あたりから始まったと思うが、近年では三谷幸喜、宮藤官九郎がその代表格である。宮藤官九郎が「池袋ウエストゲートパーク」で注目されて十年近く経つが、今の私の注目株は福田雄一である。

三谷らと同じように、小劇場（ブラボーカンパニー）の出で、脚本・演出家として、おもに深夜帯で活躍してきた。広告代理店を舞台にドラマと宣伝が直接リンクした業界ドラマ「ですよねぇ。」（TBS）は出色だったし、最近話題になった「33分探偵」（フジ）では、あっさり落着してしまいそうな事件を、放送時間が残っているので三十三分解決を延ばすという、テレビの約束事を逆手にとったドラマを作り出した。

その彼が、満を持して脚本を担当したのが、今放送中の月九ドラマ「東京DOGS」（フジ）である。小栗旬、水嶋ヒロというイケメンコンビの刑事もので、視聴率もまずまず健闘している。クールでありながら、随所に福田らしいゆるいギャグがちりばめられ、マニアにはたまらない魅力である。

ただ、「33分探偵」では、推理ドラマの約束事自体をパロディーにしていたが、今回は、記憶喪失という「謎」を引っ張って、お約束の王道ドラマに仕立てているのが苦笑いである。

（法政大学教授）